

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

FAX(03)329915367

購読料 月額500円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

社会党よ、民主主義はどこへ行った……………	2
資料1 当面する情勢と課題(党建協)……………	3
資料2 カプセルいりの猛毒を吐き出す(党建協の緊急提言)……………	4
資料3 小選挙区制阻止で国民的大運動を(党建協のアピール)……………	5
資料4 「全国ネットワーク」当面の組織と行動……………	6
資料5 全国ネットワーク「九・四」集会行動提起……………	7
資料6 小選挙区制反対「国民集会」のよびかけ……………	8
労働組合本来の姿はどこへ?……………	9
——政治論議にうつつをぬかす労組大会——	
資本主義の本質を見失うな……………	13
——円高のしわ寄せで、首切り——	
中国へ行ってみよう……………	15
——国際労研中国交流団に参加して——	
読者からのおたより……………	17

旬刊 社会通信

NO. 550

一九九三年九月二日

一九九三年九月二日発行
(毎月一日・二日・二日三回発行)

■ 巻頭言 ■

社会党よ、民主主義はどこへ行つた

国民注視のなか、社会党委員長選挙の立候補受け付け日が、メ切直前、突如延期され、十日午後五時となった。その結果、有力候補と目された三人は立候補手続きをせず、翫(いと)う)正敏氏のみが届けるといふ事態となった。

理由は、「諸般の事情」「超法規的措置」ということだ。こんなデタラメなことは党規約、委員長規約にはむろんなく、前代未聞の暴挙である。想像するところでは有力候補久保委員長代行、村山国対委員長両候補の一本化調整がつかないため、「超法規的措置」となったのだろう。

民主主義をもっとも大事にしなければならぬ社会党が、「談合」まがいのことを今なおやっているようでは、国民からさらに見放されてしまうことは必至だ。こうした民主主義の欠除は、小選挙区並立制の問題にもいえる。なぜなら――

社会党は第五七回臨時全国大会(一九九一年七月)において、小選挙区比例代表並立制の導入に反対する決議をしている。第五八回定期大会(九一年一月)で採択された「一九九二年運動方針」でも、小選挙区制の導入は許さないという方針を決定している。

この決議等はその後のもので否定されたり変更されたことはない。大会の決定は大会の決定によってしか変えることはできない。なかんずく民主主義と党の存亡にかかわる、このような重大な事柄について、中央執行委員会が大会の決定を覆すことはできない。

党規約は次のように定めている。

「第四八条 中央執行委員会は党を代表する最高の執行機関であつて、全国大会および中央委員会に対して責任を負う。

中央執行委員会の任務は次のとおりである。

①全国大会および中央委員会の決議に従い、これを積極的に実践する。」

「第四九条 中央執行委員会は、緊急やむをえないときは重要案件に関する決議権をもつことができる。

但し、二〇日以内に全国大会または中央委員会を招集し、その承認を求めなければならぬ。」

従つて、第一に、山花委員長以下中央執行委員会は、規約第四八条に違反している。

第二に、もし第四九条に規定する「決議権」を、七月二六日に行使したのであれば、その二〇日以内に全国大会または中央執行委員会を招集せねばならなかつたはずであるが、中央執行委員会はそれを実行しておらず、明らかな規約第四九条違反である。

社会党委員長選挙は十日からとなる。目下の焦点は護憲と小選挙区並立制粉碎。初心にもどり、社会党「再生」にまい進することである。

資料1 当面する情勢と課題（党建協、九三・九・三）

委員長選挙勝利、小選挙区制粉碎で「護憲」党へ

(1) 当面する情勢のポイント

- 1 「冷戦」に「勝利」したはずの資本主義諸国は、「バブル景気」の崩壊とともに、深刻な長期的不況に陥っている。失業の増大、犯罪と腐敗の蔓延、貧富の差の拡大、財政の破綻は、今やアメリカばかりか、ヨーロッパ諸国をおおい、日本も後を追っている。経済戦争はいよいよ激しさを増し、円高をめぐる攻防戦も熾烈を極めている。日本経済の牽引車であった自動車や電機製品等の輸出にも強いブレーキがかかっている。
- 2 日本の財界は、経済戦争を優位に導くためにも、国連の安保理常任理事国となって国際的地位を高めるとともに、自衛隊を世界に自由に展開できるようにしたいという欲望を強めている。そのために国連五十周年を機会に憲法第九条を改める意志を固めている。
- 3 他方で日本資本主義の腐朽化は極限に達し、ロッキード、リクルート、証券・金融、共和・佐川、ゼネコン等々、表面化した政治腐敗もますます大規模となっている。
- 4 それだけに財界は、こうした事態による政治的危機を支配体制の危機にまで進展させないために、自民党一党支配から、より安全な受け皿をもつ保守二党体制に変えようと精力を傾注している。政治腐敗の露出を逆手にとり、選挙制度の改革、小選挙区比例代表並立制によって、社会党をつぶし、保守二党体制を確立して、憲法を改悪しようとしている。
- 5 腐敗菌と買収菌は党や労組の指導部にも浸透し、財界や小沢一郎氏等の思惑に乗せられて、いまや社会党は結党以来最大の危機、文字通り存亡の危機に直面している。しかも指導部の腐敗と混乱と無責任さによって、社会党への信頼は極度に失われ、国民から見放されつつある。

(2) われわれの課題

- 1 国民と党員の信頼を回復することのできる中央執行部をつくること。まず委員長選挙で、護憲の党を再生するために小選挙区並立制に反対する委員長候補勝利にむけて全力を挙げること。
- 2 党大会では、二年前の大会決議を反故にすることなく、小選挙区並立制に反対することを、改めて確認すること。細川内閣の大臣にとどまることよりも、小選挙区並立制を阻止することの方が大切であることを確認すること。
- 3 安保、自衛隊、原発等に関する党としての基本政策は従来通りの内容を堅持していくことを確認すること。次の連立政権においては、もっと社会党の政策に近い政策が実現できるように、次の選挙では社会党の議席を回復し増やすことのできる条件を整備すること。
- 4 「九三宣言」については、縮小自衛隊合憲論や原発建設当面容認論を許すことなく、基本的に修正すること。

- 5 党の支部、総支部、県本部から、護憲の党を再生する運動を組織すること。
- 6 小選挙区並立制を阻止し、憲法改悪を阻止するための運動を、労働者、市民、女性、学者文化人とともに、各地域から起こすこと。
- 7 「護憲の社会党を再生する全国ネットワーク」の運動に積極的に協力し、その一翼を担うこと。

資料2 社会党員への緊急提言（党建協、九三・九・三）

カプセルいりの猛毒をのど元から吐き出しそう

一、保守二党体制に持ち込むことを目的とする小選挙区並立制を、中央執行委員会が飲み込んだのは、二重の意味の自殺行為であった。第一に、社会党と憲法を扼殺するための選挙制度だからである。第二に、党大会の決定（第五七回臨時全国大会の決議や第五八回全国大会の運動方針）を中央執行委員会がまっこうからふみにじることによって、党内民主主義を破壊したからである。

社会党が生き返るには、カプセルいりの猛毒にもたとえられる小選挙区並立制を、のどもとから吐き出さねばならない。

二、一方では政党への企業献金を少なくとも五年間は猶予しながら（その後の見直しの内容も未定）、他方では税金による高額な政党助成を並立的に行うのも、国民の納得するところではない。国民の期待は、選挙制度をいじる事ではなく（まして民主主義を危うくする小選挙区制の導入ではなく）、政治腐敗の防止である。そのためには、企業・団体献金の全面禁止はもとより、ヤミ献金をなくするための「使途不明金」の厳格な規制（横領とみなすなど）が不可欠であるが、それも決められていない。それどころか、三パーセント条項で無所属や小政党を議席や助成から排除するなど、違憲の内容さえ含んだものである。選挙制度改革の前に、まずこれらをあらためて見直さなくてはならない。

三、非自民の連立政権の成立に協力するまでは必要だったとしても、多くの党員が主張したように、閣外協力が限度であった。本来、社会党は「わが党を中心とする連合政権の樹立に全力をつくす。したがって、安易な保守連合はとらない」（「新宣言に関する決議」という基本方針をもっており、あくまでも社会民主主義勢力が中心となってリベラルにも働きかけた連合・連立という方針を掲げてきた。山花執行部の入閣は、この方針（大会決定）をも反故にしたものである。

選挙の大敗によって力を失いながらの入閣は、党の政策を少しも実現できないばかりか、保守のうちでもリベラルから最も遠いダーティな改憲派の諸君がイニシヤチブをもつ内閣に引き込まれ、利用されているばかりである。AWACS（空中警戒管制機）の購入すら中止できず、「邦人救助」（過去の侵略開始にはたびたびこれが口実とされた）を名目とした自衛隊機の海外派遣を自由にする自衛隊法改悪法案も阻止できず、自衛隊のPKO派遣の凍結も、プルトニウムの商業利用路線の見直しも、原発新

設のモラトリアムも、消費税の食糧品非課税化もできないまま、社会党はとりこにされて、消滅させられようとしているのである。

したがって、小選挙区制の成立を今からでも阻止し、真の政治改革や国民の期待する政策を追求するのにもし必要であれば、社会党は閣外協力にもどって、是々非々の主張のできる立場に立つべきである。

四、党の危機は党内民主主義の形骸化にもよっている。国会議員が減ると大会の地方代表議員が減らされるような非民主的な代議員選出方法や、この激動する時代に大会を毎年開かず二年に一度ですますようなこと（現行規約）も改めねばならない。

五、以上のような緊急課題を実行し、党を再生するために、委員長も書記長もきちんと責任をとって辞職するとともに、国民の信頼をとりもどし、民主主義と護憲を貫くことのできる新たな執行部を作ることが必要になっている。

資料3 小選挙区並立制阻止のアピール（党建協、九三・九・三）

小選挙区制阻止のため国民的大運動を

いま、三十八年間続いた自民党一党支配政権が終わり、細川連立政権が発足しました。この政権に、自民党とは違う国民本意の政治の実現が求められています。

しかし、細川首相はこの政権を政治改革政権と位置付け、小選挙区比例代表並立制の成立を第一の政治課題としています。小選挙区制は、言うまでもなく、自民党が野党をつぶし改憲議席を確保しようとしてこれまで再三国会に提案し、その都度、民主主義を根底から破壊する非民主的な選挙制度であるという理由で、野党はもちろんのこと広範な国民の総反撃で否決されてきたものです。

四割の得票で七割の議席を確保し一党支配体制を永続する、六割もの国民の意思が政治に反映されず死票となる制度は、まさに非民主主義的選挙制度であるとしか言いようがありません。小選挙区制は、社会党をはじめ小党の解体、政界再編、保守支配の恒久化という保守二大政党化に導くことは目に見えています。

すでに公明党は、臨時党大会を開き、次の総選挙では公明党の党名では闘わないことを確認しています。民社党も同様の状態です。小選挙区制のもとでは、小政党は存在することができず、政界再編は、小選挙区制の流れつく必然的結果であり、それがまた、小沢一郎氏をはじめとする小選挙区制導入論者の狙いなのです。そして、政界は、小沢一郎の狙いどおりすでに政界再編・社会党をはじめ小党の解体へと大きく流れはじめています。

しかし、総保守体制となった日本の政治がどのようになるかは明らかです。これまで以上に、人権無視が続き、職場での労働者の権利も、市民運動も圧殺され、開発優先・環境破壊が進むことは想像にかたくありません。憲法は改悪され、世界最大の債権国家となった日本の資本輸出を守るために堂々と自衛隊が海外に派遣されていくでしょう。それが、小選挙区代表並立制導入の本当の目的なのです。

国民の参政権の根底に関わる、議会制民主主義の根幹である選挙制度が、短期間のうち

に、政党同士の党利党略で決められていいはずがありません。総選挙では公約にもなかつた小選挙区制を、国民的討議もなしに突然の連立政権の課題として決定することは許されません。

いま、小選挙区制導入を阻止し、日本の議会制民主主義を守るための国民的大運動が緊急に求められています。国民の参政権を守り、平和と民主主義の憲法を守るために、地域から、職場から、小選挙区制反対の声と行動を起こしましょう。

資料4 「全国ネットワーク」当面の組織と行動

1、名称

「委員長選挙勝利！ 小選挙区比例代表並立制分碎！」

護憲の社会党を再生する全国ネットワーク（略称全国ネットワーク）

2、趣旨

(1) 社会党委員長選挙で護憲候補を擁立し、その当選をめざす

(2) 小選挙区比例代表並立制に反対し、その成立阻止をめざす

(3) 当面、以上の二点に全力を集中し、「社会党再生」に全力をつくし、平和憲法を守りぬく

(4) 党内外の心ある人々と連係し、運動のよりあげをはかる

3、「全国ネットワーク」の組織

(1) よびかけ人

(2) 企画委員会

4、当面の行動

(1) 全国ネットワーク「企画委員会」

日時 九三年八月三十一日（火） 午後二時～五時

テーマ 全国ネットワーク趣旨と活動方向

(2) シンポジウム「護憲の党の再生への期待」

日時 九三年九月四日（土） 午後一時～四時

場所 東京・自治労会館ホール

出席者 コーディネーター 岩垂 寿喜男

パネラー 浅井 基文 伊藤 誠

福島 瑞穂 吉武 輝子

(3) 委員長選挙

(4) 社会党大会（九三・九・二五）

名称 なくすな憲法と社会党！小選挙区比例代表並立制反対国民集会

日時 九三年九月二四日（金） 午後六時～八時

場所 東京・日比谷野外音楽堂

規模 四〇〇〇人

(5) 小選挙区比例代表並立制反対運動（九三年九月以降）

① パンフ第二弾 政治改革案提案時に（九月中旬）

② 街頭宣伝運動・署名
資料5 「九・四」集会行動提起

戦争とファシズムのあの暗い時代から半世紀。「歴史はくり返す」といわれますが、眼前で半世紀前と同じ過程が進行しているのではないかとの危惧が有識者、国民から出されています。

当時、労働組合を産業報国会とし、すべての政党を解散させ、大政翼賛会としたのは軍部でした。今日、昭和研究会は政治改革推進協議会（民間政治輪調）と形を変え、近衛文麿氏の孫を権力者の座にすえました。

その細川政権は金権腐敗の根絶を求める国民の声を選挙制度改悪にすりかえ、小選挙区制導入を「内閣の使命」と公言しています。この選挙制度は三%の「政党要件」「阻止条項」はむろん、国民一人当たり五百円、総額六百億円を既成政党同士で分け合うことに見られるように、憲法の民主主義的条項を全面的に踏みこむ憲法違反の法案です。

一、今日は「憲法体制」の危機の時代です。先般の総選挙で旧自民勢力は改憲発議議席三一四一をこえ、公明・民社を加えれば四一〇議席をはるかに超えています。
一、今回の小選挙区制導入の策謀は、この体制をさらに強め、憲法改悪の条件をつくることをねらっています。

一、その中心が社会党の動向です。社会党員、支持者から「社会党は護憲の政党たれ」と悲痛な声が上がっています。

一、私たちは以上の現実を踏まえ、次の行動に全力をあげ、「護憲の社会党」を再生するため全力をつくします。

1、社会党委員長選挙で小選挙区比例代表並立制に反対し、「護憲の党」を再生する候補を擁立し、その当選をめざします。

2、社会党全国大会前日の九月二四日、全国の党員・支持者四千人が集い「なくすな憲法と社会党・小選挙区比例代表並立制反対国民集会」を成功させ、社会党への熱い思いを全国大会に伝えます。

3、委員長選挙の中で培われた私たちの永年の活動を一つに結集し、九月二五日の党大会で新執行部をつくります。

4、憲法違反の小選挙区比例代表並立制に反対する国民運動を盛り上げ。国民とともにこの悪法粉碎の闘いを強めます。

5、当面、以上の四点に全力を尽くし、「社会党再生」、平和憲法を守り抜きます。全国の皆さん、私たちの活動いかに日本の歴史、いや世界の歴史のみらいがかかっています。もてる力を發揮し、「歴史をつくる」の気概を胸に闘い抜こうではありませんか。

資料6 小選挙区制反対「国民集会」のよびかけ

国民の皆さん、社会党員・支持者の皆さん。

私たちは、秋の臨時国会に提案されようとしている小選挙区比例代表並立制に反対いたします。

本制度は本質的に小選挙区制度であり民主主義の根本原則にたいする挑戦であります。しかも、本制度のもとでは社会党が保守政治勢力に溶解し、消滅してしまうことは間違いないありません。

PKO法の強行成立以降の憲法見直し論の横行、社会党の護憲の姿勢の揺らぎ、そして総選挙での総保守勢力の不気味な伸長。このようなときに、私たちは社会党の消滅を黙認するわけにはいきません。これを阻み、護憲と諸権利擁護の砦として社会党を再生しえなければ、政治不信は決定的となり暗黒の社会が忍びよるでしょう。

そこで私たちは、九月二五日に開催される社会党全国大会の前日、次のような志で一致する全ての方々に集まっていただき、標記のような国民集会を開催することを呼びかけさせていただきます。

一、私たちは、小選挙区比例代表並立制の導入に反対します。まず、企業・団体献金即時全面禁止をはじめとした実現可能な政治改革を先行させ、選挙制度については民意を反映できるよう時間をかけた国民的議論をお願いします。

一、社会党は、第五七回臨時全国大会で決議し、かつ先の総選挙でも公約に掲げていた小選挙区比例代表並立制反対の態度を堅持すべきです。そして護憲の党として、国民に對してその歴史的責務を果たすことを求めます。

一九九三年九月四日

【九・二四国民集会呼かけ人】(あいうえお順)

浅井基文(明治学院大教授) 伊藤成彦(中央大教授) 伊藤 誠(経済学者) 岩井 章(元総評事務局長) 岩垂寿喜男(衆議院議員) 岡崎宏美(衆議院議員) 小田 実(作家) 近江谷左馬之介(九州大名誉教授) 北野弘久(日大教授) 国弘正雄(参議院議員) 小林 晃(神奈川大教授) 小林孝輔(青山学院大名誉教授) 小森龍邦(衆議院議員) 関 晴正(前衆議院議員) 高木仁三郎(原子力資料情報室代表) 田畑 忍(同社大名誉教授) 塚本 健(流通経済大教授) 寺田熊雄(元参議院議員) 暉峻淑子(埼玉大教授) 田 英夫(参議院議員) 中小路清雄(元日教組書記長) 西野康雄(旭堂小南陵・参議院議員) 福富節男(元農工大教授) 星野安三郎(立正大教授) 松尾 均(日本女子大名誉教授) 村上喜一(前衆議院副議長) 矢沢賢(東京都労連委員長) 山内敏弘(独協大教授) 山川暁夫(大阪経済法科大教授) 吉武輝子(評論家)

一、と き 九月二四日(金) 午後六時

一、と ころ 日比谷野外音楽堂(三〇〇〇名規模)

一、連絡先 護憲の社会党を再生する全国ネットワーク ☎〇三(三七三九) 五六三八

労働組合本来の姿はどこへ？

——政治論議にうつつをぬかす労組大会——

労働組合大会シーズンの只中である。六月から八月まで三八単産の大会が終了、官公労の大どころと、交通関係がそれぞれ新方針を決定した。九月以降はJCS系民間単産など三六単産の大会が続き、十月七・八日の連合第三回大会をもって閉幕する。なお全労協と全労連大会は八月初旬に終了している。

今年の大会は、政治的には自民党の長期一党支配の崩壊と細川連立内閣の発足という大激動下、経済的には九一年三月ピーク以降の長期不況のもと雇用不安が表面化するという状況下の大会であった。状況は大きく変化し、労働組合運動の改めての活性化の必要が今大会論議で強く指摘されていたものの、まだ確信ある方針が打ち出されたわけではなく、手さぐり状態というのが、ほぼ共通の姿であった。

以下、政治路線をめぐる論議を中心に大会の特徴を整理しておきたい。

この数年の大会論議の中心は労働戦線再編統一問題だったが、ナショナルレベルの再編が、連合、全労連、全労協に整理されてからは、連合の弱点である政治路線をめぐる論議が中心にすえられるようになった。

今回の論議は第四〇回総選挙はさんでのことであり、しかも総選挙の結果をうけての大会であったことから、当然、総選挙の評価をめぐる議論と、細川新内閣に対する態度、今後の連合の政治方針に集中した。

(1) 労組出身者の当選状況

総選挙の全体状況については省略するが、連合の選挙は、これまでの枠組みをこえて、保守三新党の候補を推せんし、一方、社会党護憲派候補を選別するという「社会党つぶし」の先頭に立った。

この結果、連合構成組織の組織内候補一〇〇人のうち、当選は六四人。保守三新党の推せん候補五一人中、当選は三九人を数えた。電機、全電通、鉄鋼の選別排除ではじき出された社会党候補は一七人、うち当選は七人だった。

労働組合出身候補は、社会党六八人、うち三八人が当選した。民社党は七人が立候補、うち五人が当選。前回九〇年は、社会党八四人、当選七六人で、労組出身者の当選率は九〇・五%だったが、今回は五五・九%にとどまっている。

産別で見ると、日教組一一勝五敗、自治労八勝七敗、全通六勝三敗、全電通四勝三敗、国労三勝三敗、ゼンセン三勝〇敗、などとなっている。

(2) 連合選挙に強い批判も

連合は選挙結果について「自民党過半数割れを重視し、自民党単独長期政権にピリオドをうつことが出来たことは、新しい体制の幕開けといえる」と声明して、満足の意を表明した。

山岸連合会長はズバリ「大成功」と胸を張り、「非自民の環境づくり、そして選挙活動で過半数を獲得したのは、労働組合が協力して底上げした結果である」と、自らが新生党首脳と水面下で綿密な連携をとったことを勝因としてあげ、「そのしめくりで、目標達成につなぐために、七党に注文をつけるのは当然」だと、連合が非自民政権の生みの親との認識を示している。

しかし惨敗した社会党支持の旧総評系単産にとっては、手放しで喜べる状況ではない。連合の「保守新党支持」のアナウンス効果と、一部単産の選別推せんで、社会党の一人負け、という不満はきわめて強い。自治労や日教組の地方からは「戦犯の責任追及」の声もあがり、後藤自治労委員長は「選別支持は労組の選挙体制にマイナスに働いた」と批判。合化第八〇回大会（七・二〇～二二）では、組織内の二人が落選したことから、「選別推せんのおおりに受けた」「連合会長は社会党に対してとんでもない発言をしておきながら、選別問題に一切タッチしていない」などと言っている。本部はもつとしつかりすべさだ」「連合会長の発言の度に票がどんどん減っていく」といった痛烈な批判が飛び出した。金属機械第八回大会（八・二五～二七）では、嶋田書記長が「社会党が七〇議席に落ち込んだのは、労働組合の選別支持が大きく影響した」と批判した。

(3) 与党側に立った連合の対応

総選挙後に開かれた単産大会では細川新政権に対する態度、今後の政界再編への対応が議論となった。

連合は八月四・五日の中央執行委員会で、細川内閣発足を歓迎、「非自民連立政権の定着発展を期待、新政権に対して政策を中心に協力関係をすすめる」ことを明らかにし、政策については八党・会派が合意した四項目の基本政策、十二項目の当面の重要政策（本誌、第五四九号参照）を支持することを確認した。

そして今後の政党との関係については、①社・公・民・社民連とは協力・協調、②民革連（旧連合参議院）とは協力・支持、③三新党とは「話し合いをすすめていく」（当初三役会議原案は「友好関係」とあったのを、修正した）としている。

しかし単産の態度は二つに割れている。一つは連合の態度と同じように、細川内閣全面支持、二つは評価を留保、あるいは見守ると慎重な姿勢をみせている単産である。

積極支持単産の代表格は全電通と自治労だ。全電通の園木委員長は同労組第四七回大会（八・三一～九・二）で挨拶し、細川内閣支持、保守新党との友好関係推進、社会党との支持協力関係継続などを表明した。

細川内閣に対して「新政権の発足を心から歓迎する。その継続・安定にむけて新生党・新党さきがけとも友好関係を築いて参りたい」とのべ、細川内閣の課題について①小選挙区比例代表並立制など政治改革の年内実現、②四兆円規模の所得税減税と景気対策、③一味違った予算——などをあげ「自民党政治との違いを実績をもって示し、前進してほしい」と注文した。

政界再編の展望、次期総選挙にのぞむ態度については「今後、二大政党的体制にむけたアプローチが問われるが、今の自民・非自民が固定化するとは思わない。なお流動・再編

の過程を経て、取れんされる新政治勢力が真に豊かで公正な生活大国への道筋を歩む再編新党となるよう期待する」とのべた。この「再編新党」が何を目指すか、はっきりしないが、同大会で山岸連合会長が「今後は二つの保守政党と非保守の三極構造に分立していく。社会党は民社党や日本新党、さきがけとともに、非保守・リベラル勢力としてまとまるべきだ」と挨拶した。

山岸発言はいつもブレる。「社・民」、和解・結集を主張（九一年連合第二回大会）していたはずだが、九二年参議院選で連合候補の全滅、社会党の伸び悩みのあと新党論が一斉に吹き出すと、これに合流して、社会党解体の先頭に立つ。そして今度はあまりの社会党の惨敗に直面するや、「非保守再編新党」論である。この主張のうらには、危くなった連合会長三選のため、旧総評系組合の支持をとりつけようとの魂胆がある。

社会党との関係については、昨年の大会で支持関係の見直しを提起したが、今大会では一転して「社会党との支持協力関係の継続」を打ち出し、「社会党は連立政権与党の第一党として、政界再編に積極的なイニシアチブをとり、保守に対極する真にリベラルな生活者重視の再編新党に生まれ変わるべく、自己改革していくべきだ」と注文した。

園木発言といい、山岸発言といい社会党解体論であることに変わりはない。

自治労第六二回大会（八・二四～二六）は、「新しい連立政権のもとでの運動提起」を決定し、細川内閣支持の態度を表明した。

後藤委員長は冒頭挨拶で新政権について「新政権の基盤は盤石ではないが、政治改革や地方分散、人件、環境保全などを具体的に実現する道を開き、戦争責任でも明確な姿勢を示した姿に大いに期待できる。政、官、財の癒着構造から脱し、新しい政治システムづくりと、政治への国民の信頼回復も期待できる」とほぼ全面支持を表明した。

政治改革については「かつて社公民は小選挙区比例代表併用制を主張していた。いま小選挙区制そのものを全否定することは公党間の合意がない限り説得力がない。生みの苦しみ分け合いながら、新しい時代への礎となる決意が必要だ。与党第一党の自信と責任で議論し、決着を求めていきたい」と苦しい弁解。

労働組合と政党との関係については、連合が全面見直しを提起しているなかで、従来の「自治労（組織）」としての社会党との支持協力関係はこれからも維持されるべきだ」とのべ、これからも社会党を支える中心勢力となる意志を表明した。

しかし今後の選挙協力や「二大政党的な体制が実現していく過程では、非自民勢力との関係をいまから具体的に討論していくことが求められる」と柔軟な態度を表明した。この点について方針では「小選挙区を焦点に非自民が協力、社会党以外の候補の推せんもありうる」と明記している。

これに対して討論では新政権をめぐる「追加方針」に論議が集中し、山形県本部は修正案を提出、「社会党が自らの基本路線を放棄し、保守二大政党の方向を目指すことは、社会党の自殺行為だ」と真っ向から批判。

- ① 保守二大政党制にくみする小選挙区比例代表並立制に反対。
- ② 社会党以外の候補者勝利への取組みを求めた記述の削除。
- ③ 社会党との支持協力関係を基軸とする。

などを要求した。

討論はこれまでの自治労大会ではみられない激論となった。

青年部・岩手Ⅱ金権腐敗を一掃しようというときに小沢の選挙だけはやりたくない。

高知Ⅱ昨年、新聞広告を出してダーティな政治家一掃を呼びかけた。新生党の面々も含まれており、いまさら新生党候補を堆せない。

長野Ⅱ新政権は自治労のめざしてきたものとは異なる。政権を守るとの大義名分で立とう支援といっても、どの党に護憲・平和、民主の旗印があるのか。

茨城Ⅱ知事選で日本新党やさきがけは自民党候補を推し、非自民勢力は股さきだ。保守二大政党では財界・官僚中心の政治は何も変わらない。安保破棄、自衛隊反対を文字化せよ。

東京Ⅱ論議不足であり、別途継続討論とせよ。

沖縄Ⅱ反安保・反戦の闘いを強化せよ。

宮崎Ⅱ安全保障基本法というが、自衛隊を縮小改組した先が非武装なのか、最小限武装なのか不明確だ。

これらの批判に対して「トヨタ労連や愛知連合の支持で社会党は全員当選した。次から社会党以外の候補を支援するのは当然」(愛知)や、「社会党が保守に飲み込まれてもいけないが、連立をつぶしてもいけない。選挙協力を含めて勝ち抜く努力と準備は必要だ」(北海道)。「細川政権には政策転換の可能性がある。特に分権と地方自治では、自治体職員の高知と勇気の結集が必要だ」(福岡)など、本部方針を支持も出され、最後に本部答弁の「社会党抜きに多数派形成はありえない。社会党を育て、再生をはかる」を了承して、山形修正案は取り下げられた。(山形修正案と討論は次号参照)

自治労方針の転換に対する討論は旧総評系組合の活動家の大方の意見を代表するものだろう。

(4) 革新は新保守に埋没

細川政権に対する評価で協調姿勢をとっている組合は旧総評系だけでなく、友愛会議系組合もそうなのである。

金属機械大会(前記)では同労組が政策共闘の強化のために設置しようとしている「金属機械政治研究会」の意図や選挙総括が議論になったが、橋村委員長は挨拶で「金属機械は併用制を確認しており、並立制にくみすることはできないが、社会党は並立制を前提に政権樹立に踏み込んだ。小選挙区制でどう非自民の立場を明らかにし、社会党の主体性を確保できるか」と問題を提起した。

嶋田書記長は「細川政権の評価は留保している。新生党などを友好政党と見るかどうかは疑問であり、具体的政策で判断しない。労働者を代表する政党は必要であり、当面は社会党を支持・強化していく」との見解を表明した。

造船重機労連第二四回大会(八・二四―二五)で伊藤委員長は細川政権について慎重な態度を表明した。

「短期的には非自民勢力の結集という視点で政界の動きに協力しながら、細川政権の行

動が、日本にとって適切なのか注視する必要がある。具体的には支持してきた民社党の政策をどのように実現させるか見守っていくことが大切である」

しかし同時に政界再編について「当面は民社党を支持するが、政界再編の動向によって新しい政党支持の決断をしなければならぬ」と民社党の解散もありうることを示唆した。

ゼンキン連合第四三回大会(九・一―三)の方針はもったきびしい態度を表明している。「保守陣営では自民党から脱党した二つの新党や、日本新党を中心に新保守の政治勢力の構築にむけた多くの試みと挑戦がされてきた。これに対して野党勢力は、『革新新』ともいべき政治勢力の結集にむけた党の見直しや、思い切った革新新政党の結成という挑戦もなく、単に非自民グループの連合によって政権交代をという甘い幻想を抱いたために、新保守の流れに流され、新しい保守層の掘り起こしに手を貸したという結果になった。私たちがめざす政治勢力は、議会制民主主義を柱とし、議会の不平等を排し、弱者を温かくかかえ、古い価値観にこだわることなく、社会の改革・改良をめざす新しい革新であるべきである」。

ゼンキン連合幹部は「保守三党は働く人を基盤にしていない。基本的にはわれわれの代表ではない。新しい革新勢力づくりが必要」だとい切っている。

思い出されるのは一九四七年六月一日に発足した社会党首班の片山連立内閣への総同盟の態度である。総同盟会長の松岡駒吉が衆院議長となり、総同盟出身の右派幹部が大臣に就任した。同年秋の総同盟大会は片山首相以下社会党の全大臣が出席して、来賓挨拶は実に六時間近くに及んだという。

左派の鈴木茂三郎、加藤勘十は入閣を拒否されたが、総同盟左派の高野実は「初めてプロレタリア代表の政権が生まれた」と積極支持を表明した。しかしのちに誤りであったと自己批判している。それは労働者の要求を抑えるための下働きの役割をさせられたにすぎなかったからだ、と述べている。

首班が日本新党であることは片山内閣と条件の大きな違いだが、非自民連立政権の定着を大義名分に、労働者の要求を切り下げる下請けの役割を果たすことになれば、それこそ連合は消滅の道を歩むことになる。

資本主義の本質を見失うな

—— 田高のしわ寄せで、首切り ——

自民政権が連立政権に置き換えられ政権交代劇の幕は切って降ろされた、今までとは違う何かが、起きているのではないかという期待が、拡がっている。連立という包括的政権の与えるイメージから、何か「参加」できそうな、我々にとって身近かになったという印象が、あるに違いない。しかし、その内実は、形を変え(今様に言うならリスト)、新たな装い(独占の事務官としての政権であるという本質を隠蔽するためにかつての革新的野党を野合)を凝らした保守政権であり、いつ改憲発議の主体(小沢「新生党」こそ改憲・自衛隊海外派兵の強硬派)となってもおかしくない政権であるという事実は、押さえてお

かねばならない。

連立政権の行方は、まだはっきりとは、見えてこない。政治改革政権としての課題を果たし、短命で消滅するのか、保守二大政時代を招来させるのか、または、様々な分裂を来たし、いくつかの新しい流れを形成するのか。九月には、社会党大会が十二月を前倒しにして開催されるようだが、そのなかで小選挙区比例代表並立制を始めとして、基本政策の問題等どう決着がつけられるのか。中央と地方の対立は、更に激しいものとなっていくだろうが、そのへんの行方が大きく連立政権に影響してくることは、予想される。いや、むしろ社会党としても何らかの主体性が発揮されねばならないのだ。

政局の動きから、経済の状況へ目を移すと、円の独歩高の問題が焦眉の課題として浮上している。欧米からアン・フェアーと見られている、人件費コスト削減に協力する産業戦士（労働者群）の存在によってもたらされる、国際競争力のなせる技として、収まらない貿易黒字、その結果としての円高であるが、これも景気低迷に追討ちをかける結果となる以上、階級情勢に大きな変化をもたらしかねない。一定の安定に甘んじているかに見える労資（階級）関係も、一皮剥けば、またぞろ「合理化」発言であり、資本の代弁者たちは、ホワイトカラーの首切り（管理職に継ぐ）を平気ですべておいていけるから、産業戦士もなめられたものである。

国際競争社会だから「ほしがりません、勝つまでは」と、減私奉公で働き続け、「過労死」に象徴される奴隷労働状況をさらす日本労働運動（その内実は、ほとんど資本と一体になり自国利益という形で翼賛化しつつある）は、この人権無視の資本側の発言に激しく抗議すべき時なのに、何処をみているのか。社会党の基本政策つぶしには躍起になっても、労働者の利益についてはあまり関心がないらしい。自らの非力さをこれ以上嘆いても、何の得にもならないから、我々のやることは、このあまりに階級対立の判然とし、（労資一体で隠蔽する）情勢のなかで、資本主義の事実をその矛盾の集約するところから告発し、どうにかして「人間らしく生きる」場を確立し続けることにあると思う。

教育現場においては、本部大会でもかなり発言のあった「過労死」すら発生するまで押し込められてきている。多忙化し、ストレスの拡大する現場のなかで人間性と命を守りぬく攻防であるし、我々の後継ぎである子どもたちの心のなかに人間性をとりもどそうという種をまく取り組みである。それはとりも直さず、教育労働者自らが、競争原理の渦のなかで自分を失うまいと必死に闘う生き様の中から、ほんのわずかばかりの思いを確実に、したたかに、伝えようとする「こころみ」ではなかったのか。

情勢の激変の中、つい、事態の真の姿から目をそらされがちになる。我々が直面している事態の深刻さに正面から取り組むということは、周囲の仲間、子どもたち、地域の親たちとともに「人間らしく生きる」という泥んこの闘いを取り組むことなのだとあらためて思っているのである。

（日教組・Y）

中国へ行ってみよう

——国際労研中国交流団に参加して——

1993年9月21日発行

国際労働運動研究会の呼びかけに応じて中国交流団に参加する機会を得た。上海から西安、敦煌まで往復七泊八日の旅である。

中国はちよつと日本における高度経済成長の初期段階に似た活況を見せていた。一九九〇年、北京の中央政府は社会主義的市場経済の導入をスローガンに掲げた。株式会社が雨後の筍のように叢生し、上海市内は全国から蟻集した人々が列をなしていた。

上半身社会主義、下半身資本主義化の道に踏み込んだ中国。背に腹は替えられない、白い猫でも黒い猫でも鼠を捕るのがいい猫だと聞かされても釈然としない。一個の教義が見る目を曇らせているせいだろうか。人民公社は解体され、統制経済が緩和され、市場経済がどんどん拡大していけば、否応もなく政治の在り方も問い直されるだろう。ソ連のように政治的激動期を迎えることになるかどうか。しなやかさとしたたかさを兼ねそなえた中国のこと、壮大なる実験を取行中と受けとめてその動向を注目することにしよう。

今回の旅で、私達は広大無辺の大地に足跡を残し、悠久華麗壮大な歴史と文化の華に浴することができた。一三億の民、風土、歴史と文化は、現代中国の将来を左右する重要なファクターである。嘉峪関から敦煌まで四二〇キロの旅程を、私達はえんえん六時間バスに揺られて辿り着いた。ゴビの砂漠、オアシス集落と蜃気楼、現代のことシルクロードをずんずん西をめざせば、イスタンブール、ローマ、パリにも行ける。広大なユーラシア大陸に人類は、生活を営み、交易に行き交い、文化を運んだ。中国人の気の長さは、案外この大陸風土に関係があるのかもしれない。東西南北どの方位でもちよつと行くと海にぶつかる日本、せつかちな人間が多いのはむりもない。

(一)

中国経済の中心都市上海は、雑路と喧騒の街。メインストリートから入り組んだ横町まで、人があふれていた。車が数珠つなぎにクラクションを鳴らし、その間をぬって自転車と人がすすいすい行き交う。沿道には野菜、果物、飲食物、衣服を商った露店が軒を並べて、朝早くから夜遅くまで営業。異観は、天気の良い日に洗濯物を干す様だ。アパートの窓から物干し竿が前方に突き出される。日本のように窓際に沿って並行に並べられるのではない。公道の並木の間にもロープが張られ、男物女物の見境なく下着までがおおびらにぶら下がっていた。中国人と日本人の生活感覚の違いは、中国人は生活を外へ持ち出すところにあるとみた。家の前にテーブルを置き、家族団欒食事をとっている。傍らを通行人が覗き見していこうとお構いなしだ。生活力旺盛な中国人、その力の源はこんなところにも現れている。

(二)

秦の始皇帝が遺した宮殿の一角「兵馬俑」には驚倒させられた。これを見るだけでも中国へ来た価値がある。一九七四年に発掘されたもので、当時の兵制そのままに等身大の兵士や馬、戦車七千体が埋まっており今までに発掘修復されたのはその一部に過ぎない。始皇帝は春秋戦国時代に終止符を打ち、初の封建的統一国家を樹立した。郡県制を採り入れ、貨幣制度の統一、農業・手工業の発展、運河の開さくなど経済改革に寄与した英ましい専制君主であった。と同時に始皇帝は残忍、非道、冷酷さの点でも希有の暴君であった。歴史上に有名な焚書抗儒など、皇帝の気分次第で殺された人間は数知れない。また、不老不死の薬草を追い求めた夢想家であり、Big Wall (万里の長城) や幾多の宮殿建設に人力・資材を惜しみなく投入した浪費家でもあった。その始皇帝の権力を支えたのが強大な軍勢力である。しかし、始皇帝の死とともに秦は滅亡する。わずか一五年の短命統一国家であった。結局、凄じいまでの苛れん誅求が民を疲弊させ怨嗟の鬱積を生んだのだ。二二〇〇年後の私達が見る「兵馬俑」は、世界の八不思議といわれる比類なき文化芸術である。しかし、それは封建的専制君主権力の所産である。またその権力の運命を究極的に決したのは無辜の民達であった。

(三)

「兵馬俑」が絶対権力の象徴とすると、仏に対する人間精神の精華が敦煌の莫高窟である。洞窟を掘削した供養人は統治者、貴族、商人、僧侶、百姓等各階層を含む。鳴砂山の断崖にコツコツと洞窟をうがつこと一〇〇〇年、紀元四世紀から一四世紀におよんでいる。蟻のごとく一〇〇〇もの洞窟を掘って、仏を安置した。敦煌は東西交易路シルクロードの要衝である。西へ行く人、東へ向かう者が旅の安心を祈願して供養が始まったといわれる。一個人が生前に為しうる事柄は微小でも、累代の成果は偉大である。気が遠くなるほどの息の長い人間の栄為、そこに中国文化の底深さがある。文化大革命は、この世界第一級の文化財を破壊の危機にさらした。その蛮行を制止したが、周恩来総理である。

上海のレストランに、日本語が達者で商売上手の若い店員がいた。彼に毛沢東と周恩来のどっちが好きかと聞いたところ、周恩来という答えが返ってきた。毛沢東は歳をとってボケた、周恩来は優しいから好きだ、(ついでに)鄧小平は関係ないという。意気投合したところで、あなたの笑顔は周恩来に似ているとリップサービスのおまげがついた。そこまで言われたからにはその気になって買物をする、「おおきに」。商魂のたくましさには、中国どこへ行っても閉口させられた。中国人のこの性向を、魯迅は「無頼の精神」と呼んだ。

(四)

無頼の精神とは、ただではサービスはしないという意味で、荷物ひとつ運ぶにも見返りを要求する。中国高級酒マオタイが欲しくて、西安の土産物店で男店員に尋ねると、ついて来いと別の店まで案内してくれた。さすがに中国人は親切だと思っただらんだ見込み違い。「案内した御礼をくれますか?」とサービスの代価を請求された。結局三〇元渡したが、中国人は人を食わんばかりにちゃっかりしている。

全山砂でできている敦煌の鳴砂山の麓をラクダに乗って見学することになった。近くの農民が副業としてやっているそうだ。一人しめて二五元だが、乗る前に「農民はズルイから注意して」と総工会のガイドに喚起されていた。案の定、返り道でやおらラクダを止めて振り向き鈴を手にぶら下げて、「一〇元、一〇元」と売り込んできた。もちろん、いらないと言って手を振ったが、中天に浮かぶ上弦の月に背を向けた姿勢で溜息がついて出た。俺はラクダに乗った日本の貧乏人、手綱をとる農民氏は舌を出して稼ぐ中国人、そう遠くない将来に俺が手綱をとる立場になるだろうと。日本が中国に追いつかれる日はそう遠くないことではなさそうだ。

(樋口俊士)

◇ 読者からのおたより ◇

読者を紹介します 全国党員の意向を無視する党中央の姿勢に腹立たしい思いがします。連立政権、入閣、小選挙区並立制に乗っかり、党の主体性喪失から解体へと自滅の道を歩んでいくような気がします。そうさせない私たちのより以上の立ち上がりを決意しなければなりません。貴誌は私の活性化、ますますのご活躍が期待されます。(鹿児島・A)

編集部より 読者紹介ありがとう。おかげさまで本誌は拡大傾向にあります。多謝。しかし今の社会党の流れをとめるには不十分です。ご協力さらによりしく!

「通信」使って読者会 「社会通信」の全読者を対象にした、ゆるやかな、懇談の場——「旬刊社会通信名寄地区読者の会」を発会したくご案内いたしました。今次総選挙結果にも端的に(1)右翼の労戦統一下における「労組」足腰の衰退、(2)社会党中央指導部の混乱と動揺など枚挙にいとまない惨たんたる状況下にあると思えます。今後、地域運動においては「地区連合の発足」、社会党においては連立政権、並立制、九三宣言の論議というように、大きな流れと課題が私たちの目前に迫っております。こうした現状を直視し、労働運動の中に身をおく一人として「社会通信」を媒介として地区における運動のあるべき姿、課題、そして各々の展開から総括と目標となるべき方向性などが語り合えたらと考えるところですよ。

(名寄・S)

編集部より 「読者の会」ありがとう。元気がでます。九月一日、先約で出席できませんが、次の機会にはうかがいます。心からありがとう。

利子は勝つてから 社会党の現状、議論をしっかりし行動に着手しなければなりません。まさに正念場です。遅れておりました「通信」代同封。利子は解決してから。(旭川・A)

山花委員長に意見書 いつも、元気の出るニュースを発信いただき、ありがとうございます。山花、赤松執行部は、今や公然と、社会党解体の道をつき進もうとしており、心ある黨員、支持者はカッカと怒っています。我々の小さな力でも、何かやれることをやろう、ということ、本日、別紙の「意見書」を山花委員長あて、内容証明で送付しました。党を守る運動が、「小選挙区制阻止」の闘いと一体となって、全国から起こるよう、貴誌のいつもの奮闘を期待します。

(大阪・T)

広域からはや五年 早いものです。こちらに来て五年を経過。右も左も分からない私でしたが、「通信」No五三六、七号を読み自信がわき始めています。寝てる仲間もいます、シ

ラケもあります。しかし努力すれば展望は開けます。横浜人活裁判のように。(国労・A) 編集部より シラケてちゃダメです。寝てちゃダメです。パッチリ眼を開き、歴史を作るその気概を胸にがんばりましょうよ。国労闘争そのためでしょう。

兵庫の報告を 貴誌が手元に届くとすぐに読みます。そして、たくさんのことを教えられます。限られた紙数でたいへんだとは思いますが、全国での闘いの様子、情勢に対する考え方、見方、時には理論的な記事もいろいろ要求があります。

兵庫の岡崎ひろみ選挙について詳しく報告してもらいたいと考えています。そこから学んで次に備えないと、社会党左派は全滅していくように思われます。党と労働組合との共闘はもちろん最後まで追求していかなければなりません。連合によって、護憲派がはじかれていいる現状を見ると、独自の闘いも準備しなければならぬと思います。よろしくお願ひします。

さて同封の文書は、中央執行部に送付したもののコピーです。日本社会党の危機的状況に対して黙っていることができません。県本部や中央本部に対して、もっともっと言うべきことは言っておかなければならなかったと反省しています。(千葉・T)

◆投稿◆ 自分の頭の「はえ」を追え

目にあまる山岸の不当介入

拝啓日本労働組合総連合会長の、山岸章さん、山岸さんの社会党に対しての不当介入には目に余るものがあります。

言うまでもなく、党と労働組合は、全くの独立した別組織です。お互いの立場を尊重し合うのが常識です。原則として、政治闘争は政党、経済闘争は労働組合の任務分担任であるはずで、ですからどうも山岸さんは、この原則がよくわかっていないような気がします。社会党中央本部の人事にまで口を出したり、土井たか子前委員長の護憲運動が気に入らないと言って、兵庫二区の連合が、土井さんを推せんしないで、日本新党を推せんするにいたっては、山岸さんの思想信条がくるって来たのではないかと疑いたくなります。

もしも、山岸さん。党中央が連合の役員人事に口出ししたら、恐らく山岸さんは、烈火のごとくおこるかと思えます。山岸さん、日本新党は本質的には、自民党と変わらない政党です。なぜ土井さんを推せんしないで、日本新党を推せんしたのか、理解に苦しみます。票も金も？社会党に出しているのだから何でも俺の言うことを聞けと言わんばかりですね。山岸さん、人のことに干渉する暇があるのなら、自分の足元を冷静に見つめて下さい。連合の賃上げ闘争の結果はぶざままで、なさないの一言につきます。ストライキも打てない連合なんて、ナンセンスかと思えます。

日本が世界一の金持国になったのに、連合の賃上げ事態はお話にもなりません。私は山岸さんの指導力に問題があるかと思えます。日本の労働運動の歴史に汚点を残さないよう、人のことより自分の頭の「はえ」を追うことに専念すべきかと思えます。(T)